

少年音楽家 (四)

東京女高師教授 岡田美津

四、二通の手紙

まだ薄暗いうちに民雄は眼を覺ました。第一に感じた事は、堅い牀の上に寝たせいで身體が痺れて關節がギコチない事であつた。

民雄は半分起き直つて、

「父さん、僕はね、夜ぢう、寝てゐたの、あの牀の……」と言ひさして手の甲で眼を摩り、「一寸、父さん、どう……」此處まで言つた時目が覺めきつた。わつと低い聲を立て、彼は跳び起きさま、窓のところへ驅けていつた。樹を越して東の天が紅くなつて居るのが見えた。裏庭には誰も居なかつたが、納屋の戸は開いてゐた。呼吸を一つ深く吸つて、民雄は室内へ向き直り、急いで著物を著換へ出した。ダラリとなつてゐる衣囊の中で金貨が美しい音を立て、チャラン／＼鳴つた。一度などは、五六枚牀

の上に轉げ出した。民雄は、一寸それを落ちたまゝにして置きさうだつたが、やがて焦心つたさうな態度をして拾ひ上げて衣囊の奥へ押し込み、カチャンカチャンいはないやうにハンケチを詰めた。

衣服を著終ると民雄はバイオリンを取り上げて、そつと廊下へ出た。初は、何の音もきこえなかつたが、やがて下の臺所から、早足に歩く音や、鍋皿の音がした。バイオリンを緊と握つて民雄は裏階段から靜に庭に下りていつた。そして瞬く間に、開いてゐる納屋の入口から急ぎ足で、狭い梯子を屋根裏へと登つていつた。

ところが、登りきつたところで彼は低い叫び聲を出して急に立ち停つた。それから背後を振りかへると、親切さうな男が梯子の下から彼を見上げてゐた

「あの……あの……あの人はどこに居るんです。

あの人をどうしてしまつたんです。」と民雄は訴へた——早く下へ行かうと階段を夢中に駆け下りながら

男の雨風に曝された顔には、心から氣の毒さうな併し困つたやうな風が見えた。

「あゝ小僧どん。御前がそだな、え」と彼は言ひ悪さうにいつた。

「え、僕は民雄。あの人はどこ？僕の父さん——置いていらした部分の父さん——氷の上衣のやうな、あの部分」と、民雄は咽ぶやうにいつた。

男は眼を丸くした。そして、我知らず退却を始め

た。

「あのな、おらは——おらは——」

「多分、あなたは知らないでせう」と民雄は言葉せはしく遮つた。「あなたは昨夕見たんではない。あなたは誰？もう一人の人は何處に居ます。」

「おら、こゝに居なかつた——最初はよ。」

と男はやはり夢中で退却しながら、急いで話した。「おらか、おらはな、平藏ツていふんだ。ゆんべの人は新右衛門さんだ——おらの使はれてゐる人で。」

「それでは、その新右衛門さんは何處に居るんで

す。」と少年は納屋の戸口へ急ぎながら「その人が——父さんの事を知て居るかもしれない。あ、あそこに居る？」と民雄は、納屋から走り出て庭を横切つて、臺所の入口へと向つて行つた。

そこで十分ばかり、彼は厭な思ひをさせられた。新右衛門の他に、内儀さんも雇男の平藏もそこに居たが、その人達のいふ事が一向民雄には解らなかつた。自分が訊ねる事に満足な返事が得られないし、また自分としては、いくら返事をしても、先方の氣に入るやうな返事をしないらしく思はれた。

それから、新右衛門夫婦と平藏とは朝飯を食べると臺所へいつた。民雄にも來いと御内儀さんだけはいつてくれた。が、民雄は頭を振つて、

「ありがたう。だけど僕は澤山なんです——今は欲しくありません。」

といつて、入口の段に腰を下ろして考へやうとした。胸が一杯でとても喉へ通りさうもないのに、御飯なんか食べられるものかと思つて居た。

民雄は、すつかり心配になつて茫然と途方に暮れてゐた。父さんには此世ではもう二度と逢へないし、その聲もきかれないのだといふ事が解つた。こ

れだけは、今の十分の間にすつかり合點がいつた
しかし、何故さうなのだか又父さんが自分をどうさ
せたいと思つていらしやるのだからはまだ解りかね
た。父さんが去つてしまふといふ事は自分の身にど
う響いて來るのだから今までちつとも悟らずに居たの
である。しかしどうしたつてさうならせたくない
懸命に念じた。さうならせなくてはならない……と口
言ひながらも、いやさうなるのだ、さうなるより他
に途はないのだと知つてゐた。

それから、民雄は山の家が戀しくなつて來た。と
にかくあすこなら、四方に懐かしい森があり、その
中には鳥も居れば栗鼠も居り、頼もしい小川もある
あすこならまだ銀の湖も眺められる。そして何もか
もが父さんの事を語つてくれるだらう。あすこなら
父さんがほんとに一所にゐて下さるやうな氣がする
だらう。もしかして父さんが歸つていらつしやる事
があるとするれば、きつと、二人にとつて懐しいあの小
さな山の家へ來て、自分を御探しなさるだらう。あゝ
歸ろうあの小家へ。どうしてもあすこへ歸らう！
と一途に思ひ込んだ様子をして民雄は起ち上り、バ
イオリンを手に取つて、馬車まはしから往來へ、そ

して前夜父と一所に歩いて來た方角を指して足許た
しかに急いで去つた。

新右衛門の宅で丁度朝飯を濟ましたところへ、檢
死掛の銀田が、鳥山といふ村一番の有力な百姓でま
た、うそか眞か一番の吝嗇家といふ評判の男と一所
に荷馬車を庭へ乗り入れた。

新右衛門と平藏とが臺所口へ出て來ると、いきな
り銀田が、

「どうだい、子供が何か話したかいと尋ねた。

一向いはねい。役に立ちさうな事は何もいはね
い」と新右衛門が答へた。

「子供はどこに居る」

「つい、今しがたその段のところに居つたが」

と新右衛門は、少し焦つてあたりを見廻した。

「おれは、あの子に逢ひたいんだがな——あの子に
宛てた手紙があるんだ。

「手紙だ！」と新右衛門も平藏も共々驚いて叫んだ
「そうだ——親父の衣囊にあつたんだ。」と銀田は
焦心すやうに態と言葉短かに點頭いて見せた——他
のものが聞きたがつてゐる面白い話の材料を自分は
もつてゐるとばかりに。

「民雄へ」と宛名がしてあるんだから、讀まないで先へあいつに渡した方がよからうと考へたんだ。何しろあの子のだから。何と書いてあるか、も一つの手紙よりは、ちつとまじだかどうだか知りたいて思つてるんだ。」

「も一つのだ。」とまた異口同音に二人は叫んだ。

「あゝ、も一つあるんだ。」と鳥山が手短に述べた。

「おれは讀んだには讀んだんだが、一番終りのめちや／＼の字だけは駄目だった。あれや誰にだつて讀めやしねい。」

銀田は笑ひながら

「全くやりきれねい。降參だ、あの名前には。」と白狀して「ところが、こちらはその名前が知りたいんだ、何といふんだかさ。昨夜御前の話だと、子供は苗字を知らないらしいつていふから、今朝までにはちつと何か知れさうなもんだと實は希望にしてゐたんだ。」

新右衛門は頭を振つて、

「とても駄目だつたんだ。」

「まつたくよ」と平藏が力瘤をいれて、口を出した。

「不思議なんていふところは通り越してら。今、

普通の人間のやうな口きいてゐるかと思ふと、冰でこせいた上衣だ、鳥だ、栗鼠だ、さゝめく小川だつてそんな事をしやべるぢやねいか。きつと、ござつてるんだせ。まあ、きいて下せい、あいつは自分とバイオリンと同じもんだと思つてるらしいんで。今朝もな、あいつに何が出来るつてきいたんだ。何がしたいかつてよ。するとな、かういんだ。調子を外さねいやうに、ちがつた音を出さねいやうにさいすれや、何をしたつてかまはねいつて父さんがいつたつてさ。どうだい、まあ、え。」

銀田は思ひ沈んだ風にうなづいて、

「そういへば、あの二人はちと變つて居たよ。あたりめいの無宿者ぢやないんだ。話さなかつたけれど昨夜おれは途中で寺田の家の近くで後から追付いて馬車に乗せてやつたんだが、ちやんとした人間だと特別に氣が注いだんだ。清潔だし、ものいひも静だし、衣服はゴツ／＼してゐるが、質はいゝんだ。それでゐてな、荷物つていふと、あのバイオリンだけで何もねいのよ。」

「御前の今いつたも一つの手紙のは、どういふんだ。」と新右衛門が尋ねた。

銀田は妙に顔をにこつかせて、衣囊かぶに手を入れ、「手紙かい。さアさ、読みなせい。」と折り疊たんである紙片を渡した。

新右衛門は怖おそそうに受取つて熟視した。帳面を一枚裂いたものらしく三度折つてあつて表面に「世間の方々へ」と書いてあつた。一風かはつた手蹟で、字體が亂れてゐて讀みにくかつた。判讀し得たところを記して見ると、次のやうなのであつた。

「民雄を世の中に戻さねばならぬ時機到來したるにより、余はその目的を以て出立せり。しかるに余は今病めり甚だ病めり。萬一中途にして余の斃るゝ事あらば、余は、余の事業の成就を諸君に託さざるべからず。何卒彼を愛育したまはれ。彼は善且美なる事を知るのみ。彼は罪もしくは惡につきては何事をも辨へず。」

終に署名がしてあつたが、それが走り書きの飾り澤山の字で、新右衛門がいくら眉根を寄せても何の意味とも分らなかつた。

「どうだね。」と銀田はあてにしたらしく催促した。新右衛門は頭を振つた。

「一向分らねい。なるほど無類の手紙だな。」

「その名が讀めるかい。」

「讀めねい。」

「たれにもよ、五六人見たものはあるが、誰も讀めねい。だが、子供はどうした。あいつの手紙は意味が分るかもしれない。」

「おら探して來てやるべい。どツか、そけいらに居るにちげいねい。」と平藏は引受けた。

併し民雄は「どツかそこら」には居なかつたらしく納屋にも、物置にも、臺所の上の寢室にも、どこにも居なかつた。平藏は悄しほれて、むづかしい當感顔をして戻つて來ると、丁度新右衛門の内儀さんが臺所口へ走り出して來たところで、

「銀田さん」といかにせき込んだ調子で、

「御前さんどこの御内儀さんが、いま電話を掛けてよこしてかういふのさ。妹の御近おちかさんが電話でね、バイオリンを持つた、ちいさな男の子が今來てゐるて知らせて來たつて。」

「お近おちかのところ！こゝから七八町もあるぢやねいか。」と銀田が驚きの聲を放つた。

「あすこに居るんかな。」と平藏はかけ出しさうにして、「しやうのねい奴やつだ。飯食つてる間に抜け出し

たに、ちげいねい。」

「そうなのだよ。だけれど亭主おまさん——銀田さんもさ
—あの子をあんな風に出してやつては不可いけないと思ふよ。」

と御内儀さんは、慄へ聲で訴へた。

「御前さんの御内儀さんの話だとね、あの子が四辻でどつちへいつていゝか分らないで泣いてゐたつて御近ちかさんが話したと。あの子は家へ歸るんだつていつたさうだが、山の上のあの情なさけない家の事をいふんだらう。獨りでそんな事をさせて置かれはしない。あんな子供に。」

「今どこに居るんだ。」と銀田が訊いた。

「御近ちかさんこの臺所で、パンと牛乳で御飯をたべてゐるささ。食べさせるのに大變骨が折れたさうだよ。あの子を如何したらよかるツていふんで御まへさんの御内儀さんに電話を掛けたのさ。あの子がお近ちかさんのどこに居るつていふ事を、御前さんに知らせなければ悪いと思つたんだらう。」

「それやそうとも、こゝへ歸つてくるやうにあの子に云へつてお近ちかにいつてやつてくれ。」

「お近ちかさんも歸らせやうとしたんだつてさ。すると

いゝえ、折角ですが歸りたくありませんツていつたささ。父さんがもし逢ひたいと思つた時、すぐ探せるやうに家へ歸つてゐるんだつて。銀田さん、あんな風にしてあの子を行かせるわけには行かないよ。恐ろしい林の中でたつた一人であの子供は死んでしまふはね。假にそこまで歸りつけるとしてもさ。それさへ私は如何かと思ふ位だ。」

「もつともだ。」銀田は眉を寄せて、

「それにあの子の手紙もあるし、あの子。」と元氣付いて「其手紙で誘おびきよせられると思ふがどうだらう。親父を天にも地にも換へられぬ様に思てゐるんだから。おい〜」と急に新右衛門の内儀に指圖をして、「御前さんうちの妻つまにかういつてくれませんか。いや、それよりも直接ちかに御近ちかに電話をかけてね、あの子に親父さんから手紙が來てゐるが、こゝへ戻つてくれれば渡すつてをういつてくれつて。」

「あゝ、承知〜。」と言ひ捨て、彼女が家の中へ急いで入つた、やがてすぐ含笑にこにこして戻つて來て、

「もうあの子は出掛けたつて。」とさうなづいて「有頂天になつて悦んだつて御近ちかさんがいふんだよ。あんなまり急いで御飯も半分たべかけていつてしまつ

たつて。無事に戻つて来るだろうよ。」

「無事に戻つては来るだろうさ。」と新右衛門はむづかしい顔をして、

「だが戻つて来てから、あいつを如何するかつて事たしの足になりやしねい。」

「だがね、この手紙があるから、いくらか便りになるだらう。」と銀田は宥めるやうに意見を述べた。「まあもしか、ならないとしても、おれはちとも心配はしねい。あんな丈夫さうな子供だもの誰か使つてやるツていふものが出来るだらう。」

「死人は金を持つてゐたのか。」と鳥山が訊ねた。

「小銭が五六銭、言ひ立てる程の事はねい。子供の手紙の中に親戚みうぢがどこに居ると書いても無ければ、この村で葬つてやらなくツちやなるめい。」

「バイオリンを持つてたぢやねいか。子供も一つ持つて居たツけ。いくらか金にならないものかな。」

と鳥山の丸い眼は狡こづさうに光つた。

銀田は徐ろに頭を振つた。

「ひよつと買手があればだ。併し誰が買ふもんか。此村ぢや、郡司の五郎を除けちや弾くものはねいし、五郎は一挺持つてゐらあ。御まけに、あいつ

は病氣であるもの、自分と妹ツこと食べていくさへやつとだ。バイオリンどちやねい。あいつは買ふ氣遣なし。」

「む——さうかもしれない、さうかもしれない。」と鳥山は澁々同意して、

「御前のいふ通り此村でバイオリンに用のあるのは五郎ばかりだな。それに、そのバイオリンだつて、たいした價かのものぢやあるめい。して見るとやつぱり村の御厄介かなあ。」

「さうだ—だが—おら差出た事いふぢやねいが」と平藏が横から口を出して、

「あの子の前ぢや内所にして置きなさるが可えいとおもふ。あいつに、何訊いたつて、はあ、駄目なんだから。そこだけはもうまちげいねいんだ。それに萬が一、さかさまに、あいつの方から何か尋ね出したが最後、こつちが困つちまふべい。」

「貴様のいふ通りだ。」銀田は妙に笑つて、

「訊き糺たしても無駄なんだから、こいつは、子供の前ぢやだんまりツことしやう。それやさうと、あいつ、さつとさ此處へ來れやいゝにな。あいつに宛てた手紙の内容なひが知りたいんだ。どこの誰だつてい

ふ謎を解く手引になるかと頼みにしてゐるんだ」

「とにかく出掛けたいから。」と新右衛門の御内儀さんは、臺所へ行きかけて繰り返した。

「氣長くさへ待つてゐればきつと此處へ来るよ。」

「そうよ氣長く待つてゐれや来るだろう。」と無愛想に新右衛門は同じ事をいつた。

銀田と鳥山は荷馬車の腰掛に身を落著け、平藏は主人の方を心配らしくまた言譯がましく盗み見てから、入口の最下の段に腰を下した。新右衛門は、臺所の椅子に窮屈さうに掛けてゐた。新右衛門は決して身を樂な姿勢に置かない人で、なんでも事をするのに窮屈なやり方を探し出して、きつとさうする仁だと平藏はよく言つてゐた。であるが、今朝風來の子供が戻つて来るのを待つなんて下らない用事のために、新右衛門が貴重な一日のきまり仕事を邪魔されても構はずにゐるのが、平藏には不思議千萬で實際眼に見てゐるからこれ眞實だと思ふ位なのであつた。

待つてゐる連中は、民雄の来るのを待遠しがつてゐたものゝ、彼が馬車まはしを走り／＼随分早くやつて來たので、さすがに驚かされてしまつた。

「どこにあんるですか、父さんから僕へ手紙が來て居るつてきゝました。」と民雄は息せき訊ねた。

「そうだ、手紙が來てゐるよ。そら、こゝに。」と銀田は折り疊んだ紙を早速に取出してやつた。

あせつてゐたものゝ民雄は、まづ大切さうにバイオリンの函を下に置いて、それから手紙を開いて一字も漏らすまいと讀み入つた。

子供が讀んでゆく顔付を、四人の大人は見守つた。涌き出る涙を眼をしばだゝいて拂ひ退けたなど見てゐると、こんどは華やかな紅色が顔に汐して、それがだん／＼濃くなつて終には子供らしいその顔が燃えるのかと思はれる程になつた。そして、手紙から上げた彼の眼も亦驚きに輝き渡つてゐた。

「父さんが、遠いところから僕に之を書いて御よこしになつたの。」と囁いた。

新右衛門は澁面をした。平藏は可笑しさを咳に紛らした。鳥山は、眼を丸くして嘲るやうに肩をすばめた。しかし、銀田は顔を鈍い紅に染めて、

「いゝや、」と途切れ／＼に「その手紙はな—えいと—ウンそうだ。御前の父さんが、御前にツて衣囊の中へ入れて置きなすつたんだ。」と終の方は一息

にいつてのけてしまつた。

民雄の顔は急に曇つた。

「僕は—便りがあすこから—と言ひかけて急に顔
をまた冴え〜とさせて「ですけれど、あすこから父
さんが書いて御よこしになつたとまあ同じですね。
僕にツて置いていらしつて、そして僕のする事が書
いてあるから。」

「何と書いてある。何と書いてある。」と銀田は聞き
落すまいと用意して、

「何をしろとか書いてあるかい、どれ御見せ。一同
に分るかな。それを讀ませてくれるだらう。え。」

「は…い…」と民雄は吃つた。行儀よく手紙を
差出したけれど如何にも氣が進まぬらしかつた。

民雄への手紙は、も一つとは大變ちがつてゐた。

全文は長かつたがあんまり役に立たなかつた。一行
〜はよろ〜の不揃であつても、一語一語は几帳
面に書いてあつた。之を讀むのは幼い子供だといふ
事を、忘れぬ親の心遣が見えてゐた。帳面の紙二葉
に記したもので最後に「父さんより」と唯一語書いて
あつた。

銀田は音讀した。

「民雄、父さんは遠いところで御前を待つて居る
よ。悲むではいけない。そうすると父さんも悲しく
なるから。父さんは歸つて來ないが、御前がいつ
か父さんのところへ來てくれるのだ。バイオリン
を頭に、弓を絃にあて、「父さん」といつて來るの
だ。その時にバイオリンでな、御前が置いて來た
美しい世界の事を父さんに話してきかさなければ
いけない。民雄、世界は美しいのだよ。それを忘
れてはいけない。もし、どうかして美しい世界で
はないと思ひたくなつたら、御前自分で、その氣
さへあれば世界を美しくする事が出来るのだとさ
う思ふのだよ。」

何處を見ても見馴れない人や、物のある、知らぬ
人の中に御前は今居るね。御前には解らない事が
あり、嫌な事もあろうが、怖れてはいけない。そ
して山へ歸りたい〜と人に逼つてはいけない。
御前のバイオリンの中に御前の欲しがるものはみ
んな入つて居るのだから。この事をよく覺えて御
いで。御前は、弾きさへすればいゝのだ。そうす
ると、あの山の家の上にあつた廣い宮が、御前の
頭の上に来てくれるし、山の中の森で仲よしだつ

た、いろ／＼なものが御前の傍に來てくれるよ。」

「いやはや、も一つのより猶といけねい。」と読み終つた銀田は唸いた。「實際何も書いてねいや。どうだ。あんな場合に筆をとるとしたら、何か意味のある事を書きさうなものぢやないか。何がつかまへどころのある、此子供は何者だ位の事をよ。」

何とも返事のしやうもなかつたので、一同は唯もつともだそばかりに點頭うなづいて不承／＼に同意した。

が、それが何の足しにも實はならなかつたのである。(四の終)

海邊にて

坊やが海邊に寝ころんでゐた時に、

家の人達が坊やに

木で出來た鋤を下さつた。

「濱邊の砂をほつてお遊び」と。

坊やのこしらへた澤山の穴が

コップのやうで空虛からつぽでした。

その穴の一つ一つに海の水が這入つて來て、

とう／＼、はいれきれないほど一杯になりました。

スチープンソン

夏やすみ

めつきり暑くなりました。いよ／＼暑中休暇になります。これからしばらくは、子供達も、朝から晩まで、母様の膝もとにくらすことになりませう。幼稚園に行つて居れば、定めのおやつだけで我慢の出來る子供も、つひ手短にお菓子や、果物や、アイスクリームや、食べるもの飲むものが目につけば、そして、また、暑い／＼でゴロ／＼してゐれば、おれだりも出ませう。食へ過ぎぬよう、飲み過ぎぬようと、この暑いさかりには、母様方の苦勞もなか／＼でせう。ことに蚊帳の中の廻轉運動のげげしさには、薄い寝びえじらす位では、なか／＼安心も出來ませう。ことに疫痢といふ恐しい病魔は、とりわけ、五つ六つ位の幼児を好むときいておりますから、注意の上にも注意が大切でせう。

けれども、子供はやはり元氣なものです。眼もくらむやうな炎天にも、汗みづくになつて、印度人のやうに焼けて、蟬取りに、蜻蛉つりに餘念のない腕白盛りを見ますと、暑い／＼を口癖に團扇をはなすことも出來ないで、喘いでゐる大人の方が背をぬがればなりませう。よく遊んで、よく眠つて、この一箇月たらずの休みの間に、背も伸び、肉もつき、顔色も染まつて、元氣にみちた子供達を、幼稚園に送りだし、これをむかへる先生方も、お友達も、た意氣あたるべからざるものでありたいものです。發育さかりの幼児達には、心も、からだも、この一箇月が實に貴い時となりませう。